

『フォーラム第8号』によせて

庄司 洋子

全カリが1997年に本格的に実施されてから5年を経過した。そこで、本号の特集として「全カリ5年間の成果と展望」を組み、多く関係者からの声を寄せていただいた。とくに、一昨年(1996)の3月には全カリ教育の第一期生を世に送り出したので、卒業生からの率直な感想も掲載することができた。全カリとしては、学内外からの評価を大事にしなければならないと考え、さまざまな取り組みをしてきているが、今回、またあらたな視角から全カリの捉え直しが可能になったといえよう。

いま、大学にとどまらずあらゆる組織と活動が評価の波に洗われているが、私たちはこの立教大学の全カリの現状をどのように評価すべきなのであろうか。いまから10年以上前に、当時の文部省がいわゆる大学設置基準の「大綱化」を打ち出した時、大学が進むべき道は大きく二つに分岐した。一つは、可能なかぎり教養教育を身軽にしてその分を専門教育に注ぎ込む道、もう一つは、基準の緩和を受けて独自の教養教育を存分に展開する道、である。激しい競争的環境のなかで個性化をはかろうとする多くの大学が、当然のごとく前者に流れたなかで、立教大学は、待ち構えていたかのように後者を進んだのである。最近になって、文部科学省が「教養教育の重視」を全国の大学に向けて呼びかけているが、当時の状況下において、教養教育の改革というあまりに地味な勝負をためらわずに選択した立教の諸先輩方の識見には、あらためて驚くばかりである。精緻な評価システムや評価基準を議論するまえに、私たちは、もう一度、この大学が行った大きな決断の原点を確認しつつ、その後のたゆみない蓄積について丁寧に適正な評価をしなければならないだろう。

全カリ運営センターは、他大学からのヒアリングや新聞・雑誌の取材に応じる機会も多いので、その都度、全カリという資産を誇らしく披瀝する反面で、学内での全カリ運営の諸局面においては、いまなお、思いがけないほどの素朴なレベルでの困難に遭遇することも稀ではない。その両極のなかで、全カリの現状について、奢ることなく、さりとて、めげることもなく、淡々と適正な自己評価を行なうこともまた、全カリにとって容易ではないが極めて重要な課題の一つであろう。

「さらなる発展」「永久運動」を看板とする全カリは、つねに、大小のさまざまな変革に取り組んでいる。全カリは、それに注がれる学内・学外からの厳しい評価を、引き続き最も大切な拠り所にしなければならないと思う。

(しょうじ ようこ 全学共通カリキュラム運営センター部長)